

高脂血症小児の生活指導指針に関する研究

分担研究者	大阪大学小児科	藪	内	百	治
研究協力者	岩手医科大学小児科	畠	山	富	而
	東北大学小児科	多	田	啓	也
	日本大学小児科	大	国	真	彦
	東京女子医大小児科	草	川	三	治
	東京慈恵会医大青戸分院内科	中	村	治	雄
	都立小児病院	熊	谷	通	夫
	京都府立医大小児科	楠		智	一
	宮崎医大小児科	早	川	国	夫
	宮崎医大公衆衛生学	常	後	義	三

〔研究目的〕

成人の心疾患による死亡は年々増加しており、最近では人口10万対死亡率107.5となり死因の第3位を占めている。心疾患の大部分は虚血性心疾患によって占められており、虚血性心疾患の成人死因に果たす役割は極めて大となっている。成人期の虚血性心疾患の予防には小児期からの高脂血症、肥満、その他の危険因子を少なくすることが重要であると考えられる。従って本研究では小児期における高脂血症の実態を把握し、生活環境の調査により現代の小児のもつ危険因子を分析するとともに予防のための生活指導指針を確立することにある。

〔研究成果〕

本邦の各地区における小児の血清コレステロールの調査結果によれば、血清コレステロール値の年度別の著明な変化は認められないが、低年齢児から学童、成人にかけ従来の報告同様上昇の傾向が認められている。血清コレステロール値の高いものの中には HDL コレステロールの上昇するものもあるが、大部分は LDL コレステロールが高くなっており注意が必要であると思われる。

肥満と高脂血症は特に関連が深く、肥満者では血清コレステロールの高いものも多く見出されるが、食事、運動などの生活指導によって肥満度が低下すれば高脂血症がかなり軽快することが認められている。また成人期でも肥満と高コレステロール血症は密接に関連している。血清コレステロールは加齢とともに高くなるが、肥満度の高いものほど上昇が著明である。これらの結果から肥満は小児期、成人期を通じて大きなリスクファクターであることが示された。

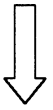
血清コレステロールの検査で高値を示した小児の1年後の検査では、依然として高値を示すものが比較的多く認められる。加齢、肥満、食事などコレステロールを上昇させる因子が多いため、高コレステロール者には適切な生活指導、健康管理が必要である。また一方、検査によって家族性高コレステロール血症が見いだされる。東北地方では1/1,252(0.08%)に見いだされており、早期から適切な治療を実施することが可能となっている。

血清コレステロールと密接な関連をもつ栄養摂取状況の調査も昨年にひきつづき実施されている。小学生の栄養素摂取状況は比較的基準量に近い値を示していた。これは学校給食が大きな役割を果たしていると思われるが、一般に動物性食品摂取は50%をこえており、不飽和脂肪と飽和脂肪の比(P/S)は1以下となっていた。P/S比は2に近い方が推奨されており、食事内容の改善を考えねばならないと思われた。小児から高年齢層にわたる食事の調査では、年齢の低いものほど肉類の摂取が多く認められている。血清コレステロールは加齢とともに高くなるが、縦断的な栄養素摂取状況調査では直接的な関連は見いだされず、他の種々の因子が推測された。両親のコレステロール値と子供のそれとはかなり類似した傾向を認める。このことは素因の因子も考えられるが、食習慣が大きい役割を果たしていると思われる。子供の食事内容は母の食品選択性と深いかわり合いをもっているので、母親の適切な指導によって家族全体が好ましい食事を摂取するよう配慮することが必要である



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



〔研究目的〕

成人の心疾患による死亡は年々増加しており,最近では人口10万対死亡率107.5となり死因の第3位を占めている。心疾患の大部分は虚血性心疾患によって占められており,虚血性心疾患の成人死因に果たす役割は極めて大となっている。成人期の虚血性心疾患の予防には小児期からの高脂血症,肥満,その他の危険因子を少なくすることが重要であると考えられる。従って本研究では小児期における高脂血症の実態を把握し,生活環境の調査により現代の小児のもつ危険因子を分析するとともに予防のための生活指導指針を確立することにある。